
変人ハイスクール

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変人ハイスクール

【NZコード】

N0342V

【作者名】

桜

【あらすじ】

私立第一眩半岐高校

一般的などこにでもある学校だが、この学校には少し変わった規定がある。

1年。2年。3年。それぞれで、ある部分を基準に3人が選ばれるのだ。

選ばれる理由は。

『変人』

頭の良さでも悪さでも運動が出来るでも出来ないでも性格が悪い悪くないまでも。

ある一定に何かが飛びぬけていたり周りから異常に見られている
といつのが選定される基準だ。

そんな変人だらけの学校で青春を夢見る少年を。
周りの変人に負けないくらいの変人変態少女がぶち壊す物語。

1. 愛してるノ

「ハアハア……あー君、あー君……」

少女は暗がりの中に屈る。

荒い息が部屋に響く。

カーテンから漏れる光が朝である事を示していた。

ベッドの上、綺麗な少女は写真立てを持っていた。
写っているのは一人の少年。

少女と変わらないぐらいの年だ。

写っている少年の表情は写真だと云ひのにに眉間に皺を寄せていた。
嫌がつて云ひながらカメラ日線。

だが少女にはそんなのはどうでも良かつた。
朝起きたら写真立てを見つめるのが彼女の日課なのだ。

舌を出し、荒い呼吸を繰り返す彼女の瞳は傍から見れば異常に見えるかもしねない。

我慢出来ないと行つた様子で彼女は身震いして見せると、写真立ての彼にそつと舌を這わせた。

下からゆづくつと上へ舌を持つていく。

唾液が写真立てに付くのも気にする様子は無い。

寧ろ必要以上に唾液を絡ませている程だ。

唾液の糸を引きながら彼女は写真からゆづくと離れる。

「ああああ……あーきゅん、私のあーきゅん……」

光悦な表情で彼女は吐息を溢す。

彼女は、[専]眞に[専]る彼を。

心の底から。

死ぬほど。

首を絞めたくなるほど。

愛していた。

それは、彼が彼女を思つていよいよがいまいが関係の無いほどこ
・

1. 愛してる（後書き）

息抜き程度にやつてこいつかなと……というかいい加減作品が少ないなと……今溜め込んでいる小説とは別なので連載は不定期かもです。

2. 幼馴染に愛されすぎてヤバイ（前書き）

突然だが俺の幼馴染、九重 雪は変態だ。

理由は俺、狭山 梓を愛しすぎてだといつじやないか。
いや、のりけじや無いんだ。

……いや知らないんだから仕方ないか。

2. 幼馴染に愛されすぎてヤバイ

「ねエ、あー君なんで今日も先に学校に行こうとしたの？」
雪は綺麗な黒髪を垂らしながら梓の表情を覗き見る。

「……」

そんな可愛らしい仕草にも梓は反応せず、ふい、と横を向く。

「……ねエ、ユキ泣いちゃうよ？ そんな態度取つたら……」
今度は潤んだ瞳で覗きこんで来る。

「……っ」

少しバツが悪そうな表情をしたが、それでも梓はそっぽを向く。
みるみるうちにユキの表情が崩れしていく。

「そんなんア……あー君ヒドイよオ」

メソメソと泣き出した。

「あー君が無視するなら、私、私……」

(……なんだよ、もう泣いてんだから次はどうなるんだよ)
心の中で悪態を付きながらも泣いているユキに視線を向ける。

「……殺しちゃう」

ゾッとする声と、瞳孔の開いた瞳で梓を見ていた。
カバンから布を巻いた包丁を取り出す。

「どうせ無視されるんだし死んでも変わらないよね？ ね？ 頭は毎日持ち歩いた上げる 上半身は居間に飾るの 帰つて来たらタダでママつて抱きつくるー 下半身はー……ベッドの上ね？」

キヤツ 「

「…………ま、待て、俺が悪かった、な？ 朝はちょっと怠いでたんだ、うん」

顔を真っ青にしながら梓は答える。

「んー、何だそりなんだー、だつたら仕方ないね？」
包丁はしまつてくれた。
さつきまで泣いていたのに今はとても嬉しそうな表情で腕に抱きついてくる。

(……今回も嫌われるのは失敗か)

2. 幼馴染に愛されすぎてヤバイ（後書き）

こんな子いたら怖いですね？

今作は15禁です。

エロありで行きます。

苦手な方は戻るを連打です。

3・友達も頭おかしくてヤバイ

「あ、あんまくつつくなよ……」
中身は子供っぽいユキだが、昔と違つて体格までそうだとはい
ない。

「やーあーそれともくつこっちゃ駄目なの？ 胸当つてるのとかイ
ヤ？」「

(解つてやつてるのか……！)

「良いから離れろつて！ 学校もつそこのじゃネーか！…」
無理矢理ユキを引っ張がす。

「……解つた」

「ぶすつ、と不機嫌な表情を見せるもユキは解つてくれたらしい。
私立第一眩牟岐高校と『カデカ』と書かれている校門を跨ぐ。
ユキが梓とユキが通つている学校だ。
普通の学校よりかは大きな広さを持ち、少し変わった名物があ
る事があるんだ。

梓もユキも一月程前に入学してきた。
ユキの妨害も受けながらだが、梓は夢の青春を築こうと友達作り
は上手く行つていた。

そんな友達からの声が後ろから聞こえた。

「おーいアズサー！」

後ろからブンブンと手を振りながら近づいてきた男はは最初に梓
の友達になつた親友のような存在。

「よー！ 神谷ー！」

神谷は大きな体をしているが、とても性格が良い上に硬派が似合う少年だ。

そんな神谷を梓は尊敬していた。ユキのせいで女嫌いになつた梓は、神谷のような男氣溢れる硬派な人間に憧れていた。

梓の隣から何故か舌打ちが聞こえた気がしたが梓は取り合えず聞こえないフリをする事にした。

「……と、ユキちゃんもオハヨ」

流石の硬派な男でもユキは苦手な様子だった。包丁をカバンに入れている男得意とする人間は早々いないだろうが。

「……」

無言でユキが神谷を睨む。

「お、おいユキ？ 挨拶ぐらい返せよ」

このやり取りも既に一月前から繰り返されている。何故ココまで梓が執拗に嫌っているのかは解らないが。

良くこんな態度を取る女が近くに居るのに、神谷は梓を友達で居てくれると、梓は感激している。

「オハヨウ神谷君、それ以上あー君に近づいたらブチ殺すから

それだけ言うとユキはふん！ とソッポを向いた。青い顔をしているのは梓だけではないだろう。

梓が女性と喋っていたら別だが、流石に男と喋っている時今までユキは噛み付いてはこない。

多少は不満そだが。

だがそれでも神谷だけは別だった。

（あ、朝から何言つてんだこの女は……）
呆れて何も言えない、と梓は肩を竦める。

慌てて神谷の顔を見てみると、以外にも神谷は笑顔だった。
「はは！ 相変わらず凄い好かれてるなアズサは！」

本当にこの男は良く出来ていると梓は感心する。

（神谷の爪の垢でもユキには飲ませてやりたいくらいだ……）

「つと、悪い靴紐解けてるわ、先に行つてくれよ」

そういうとしゃがみ込む神谷に合わせて、何故かユキはカバンを地面に叩き付けた。

「つー？」

その音に驚くもユキは至つて無表情なまま。

「……ゴメンね、あー君、私もカバン落としちやつた、先に行つて？ 寂しいかもしれないけどスグ行くからね？ ね？」

（いやおもいつきり叩きつけてたじyan……）

口に出して言いたかつたが、ユキの無表情は怖かったのですごと先に進むことにした。

「……」

「……」

無言で靴紐を結ぶ神谷とカバンを拾つユキ。

ユキはカバンを拾う瞬間、カバンから再び包丁を取り出した。ギラつく包丁の歯は、躊躇も無くしゃがんでいる神谷の頭上に振り下ろされた。

無表情のままユキは顔を動かす。

「死ねクソ野郎」

しかし包丁は神谷の脳天に刺されることは無かつた。

間一髪で、神谷がユキの腕を捕まえたのだ。

ユキはその手を振り払つと一步一歩後ろに下がった。

神谷は立ち上がる。

その表情に焦りでも驚きでも無かつた。

先程までの爽やかな笑顔を出していた神谷の表情は、ユキを見下すように睨んでいた。

「テメークソビツチよお？ 毎日毎日殺しにかかるんじゃネーぞオラ ア？ 剥くぞテメー」

ドスの利いた声がユキに向けられる。

そんな齧しの言葉にユキは動じる様子も無く包丁を空中で何度も投げて見せる。

器用に空中で受け取る様子は、手馴れた手つきだ。

「お前のあー君を見る目はムカつく、でもあー君はお前を気に入ってる、だから目の前で殺さないようにしてるので……あー君は渡さない、私の、私の、私の、私の」

「あああああ？ あれは『俺』のだ。クソみてーなストーカー女は消えろ殺すぞ」

男氣溢れる神谷という少年も、梓を愛していた。

同姓だというのも関わらず、愛していた。

それを察知していたユキは神谷の事を気に入らないのだ。

一瞬即発の空気が流れ、二人が睨みあう。

そんな二人を気にせずに学校に入つていく他の生徒達は、驚く様子は無い。

この学校では日常茶飯事のよつなもの。

この一人が、では無く。

この学校 자체が少し『異常』だからだ。

ユキの包丁を握る手に力が入る。

「おーい、速く行くぞー」

緊張の糸を切った声が二人に掛けられた。

それは先に行つた梓が遅い二人を心配して戻ってきたのだ。

「待つてエあー君 スグ行くね？ ユキがいないと寂しいもんね

? もんね？」

ブチ切れた表情が一瞬で元に戻り、満面の笑顔で梓に駆け寄つていぐ。

そんな様子の梓を見て神谷は舌打ちを溢す。

「いつかゼッテ一殺す……」

4. 幼馴染がヤンテレでヤバイ

「あー君、寂しいね…… ゴキと離れ離れになつても泣かないでね?」

廊下を隣で歩くウルウルとした瞳でユキが何か言っているが、梓は呆れた表情を見せるだけ。

「寂しくもクソもネーよ……クラス違うんだから当たり前だろが」
一ヶ月間同じ事を言い続けていた幼馴染の頭の中が心配に思う今

いや既に手遅れだつて、と思ひなおす。

「だって私が見てない間にあー君に近づく虫が……」
言い切る前に通り行く女性が梓に肩をブツけた。

「あ、」のんなで……」

卷之二

可愛らしい少女に梓は一やけてしまつ。

「キキキキキサマアアアア！―― あー君に触れてんじや無いわよクソビッチガガガガガガガガガガガガ――！」

(つー? 「おおおおユキが良い具合に壊れた! ? ）元から壊れてる

「ひ、ヒイイイ！？」

いたいけな少女が一気に恐怖に染まる。

瞳孔開いて雰囲氣で髪の毛が浮いている。

「や、止めるユキー 女の子泣いてんじゃねエか!!」

「退いてよあー君……その女殺せない」

必死でユキを止めてこるといたいけな女の子がダッシュで逃げ出していた。

ホツとしほはいるが、心の中では泣きそうな様。

(何でコイツはいつもいつも素敵なフラグぶつ壊してくれてんだよ
!—)

「危なかつたねあー君？ あの女きつとー？ あー君刺そつとしてたよおー？」

「…………毎度ながら妄想力凄いね君……こきなり刺そつとしてくるのはお前ぐらいだよ…………」

呆れながら肩を竦めて見せる。

「あー君にだつたら刺されても……ッキヤ 」

「ウルセーよ……お前は純粹キャラしたいのか下ネタキャラしたいのかどっちだよー」

「あー君の前だと下ネタ言いたくなつちやつの……」

「可愛い感じに囁つても騙されねーよー それ只の変態だからなー！」

何とかユキを引き剥がして自分のクラスに行く事は出来た。

「**ギ**がいな**い**樂園のマイクラス、……。

とい**う**わけでは。

無**い**……。

4. 幼馴染がヤンヒレでヤバイ（後書き）

私は下ネタが好きなオッサンなんだ・・・・。
不斷の小説じゃ出来ないからね、シモネタ。
別に私は変態じやないからね。

5. クラスマートも結構ヤバイ

「あ……梓君」

ドアを開けて最初に迎えてくれたのは妙に顔が青い少女。生気を感じられないという表現が似合つ気がする。髪の毛が黒よりか青よりなのが人物を更に薄く見せる。何故ドアを開けた瞬間彼女が立ち塞がるように居るのかは解らない。

「カエデ……教室入れないんだけど……」

梓の言葉にカエデは無表情のまま反応しない。カエデはそつと梓に見えるように腕を上げた。手首には包帯の後が。

「……見て、また斬っちゃった……」

無意識にダラダラと背中に汗が流れるのが解る。彼女は自傷願望の持ち主。

簡単に言えば自分を傷つけて注目を浴びたがる女だ。

「……解ったから退いてくれ」

前は首に紐の跡つけてきた事を梓は思い出す。サッサとカエデを退けて自分の机に座る。

「ねえ見てよ梓君……私ってすっごく可哀想

(付き纏つてきやがつた!?)

「解った解った! 可哀想可哀想! だからこっち来ンなー!」

「……どれくらい可哀想？ ねえ」

「めんべくせー！ もう帰れよマジで！…」

「どれくらい可哀想か言つてくれなきゃ帰らな……ブフウー…？」
言い切る前に後ろから思いつきり叩かれていた。

「はいはい、もう朝のホームルーム始まるから座ろしつねー」

眼鏡に三つあみと「見事な委員長スタイル」な委員長が自傷女を連れて行つてくれた。

（自傷女が気絶してんだけど……結構な一撃だつたんだろうな……委員長なのにスゲー威力だ……）

委員長なのに、というわけのわからない偏見付きだが何にしても助かつたことには変わりない。

5. クラスマートも結構ヤバイ（後書き）

病んでるのも色々あるよね

6. 担任は年齢的にヤバイ

学校のホームルームが始まる。

指先一つで勝てそうなお爺ちゃんがつちの担任。

学校でも相当な高齢の方らしく、皆『ジーちゃん先生』とか親しみを込めて呼ぶので梓も本名は知らない。

昔は鬼の熱血教師だったとか言われているがそんな設定を言われても知った事ではない。

一つのクラスに20人と、少しけなめの人数だが。

クラスの量自体は多いのだからあまり関係無いのかもしれない。というよりジーちゃん先生の点呼が遅いので朝のホームルーム自体は一時間目が始まるかなりギリギリで終わる。

そんな20人の点呼がやっと終わった。

「……？」

いつもならそこで一時間目が始まるのだが、ジーちゃん先生は動こうとしない。

若干高齢の方に見られるフルプルした動きはあるが。

「えー、皆しゃん……今日は皆しゃんが学校に来始めて丁度一ヶ月になりますね！」

クラスが少しづわついた、隣の席の神谷も意味深に「まさか……

！」とか言っている。

いや一ヶ月前から解っていたことじやん……何て梓は心の中で突っ込む。

この学校恒例の名物だ。

一ヶ月に一度決まる行事。

(ジーちゃん先生……入れ歯取れかけてんだけど)

そう思つても梓は注意する事は無い。

この学校では極力目立つては行けないのだ。

何故ならそれも今から言うジーちゃん先生の言葉で解る。

「このクラスの変人査定が終了しました……今から呼ぶ人は前に出てきなしゃい……」

『変人査定』

その名の通り変人を一ヶ月間査定する期間だ。

この学校、私立第一眩牟岐高校は一般的などこにでもある学校だ。だがこの学校には少し変わった規定がある。

1年。2年。3年。それぞれで、ある部分を基準に3人が選ばれるのだ。

選ばれる理由は。

『変人』

頭の良さでも悪さでも運動が出来るでも出来ないでも性格が悪い悪くないまでも。

ある一定に何かが飛びぬけていたり周りから異常に見られているというのが選定される基準だ。

選ばれることで何かが手に入るわけでも無いが、この学校の昔から
の伝統なのだ。

強いて言うならこの学校変人集まり過ぎ面倒見切れねーから一番
ヤバイの中心に見て行こうや。みたいな感じだ。

選ばれた変人は色々なイベントに使われたり、何かしら色々とし
なければいけないらしい。

その分の報酬もあるらしいが、梓も詳しくは知らない。

只、言えるのは、

そんなのに選ばれた日にやア 学校の青春なんて謳歌出来ない。
だからこそ梓は選ばれるこの日まで目立たぬようにしてきていた。

か伝統が無くなる事は無い。

そして、選ばれた変人達だが。
選ばれた『変人』達は特に憤慨する者は今迄におらず、そのせい
か特定のされ方は一月間でどれだけ変人だったか。

寧ろ一つのステータスとしてその称号を欲しがるものも居る。

何故こんな規律が古くから存在しているのか。

只それだけ。

毎月『変人』は選抜されるが、変人奇人というのは完全に人とは
違う為、ほぼ選抜3人が変わるわけでは無い。

ここで例として今の三年生の変人を紹介しよう。

一人は学園一の美女。

だが自分が超能力が使えると言い回ってる電波少女。
言うだけならまだしも、自ら行動をし、多くの問題を引き起こしている所から変人認定。

一人は学園一の喧嘩自慢。

最強最悪の不良として時折学校を騒がせる危険人物。
無論変人認定。

一人は生徒会長、学園首席、運動神経抜群と異常までの完璧から変人認定。相当な変態だから……という噂も。

このような変わったシステムを面白半分や興味本位で学園に入る者は以外にも多い。
そして、この日。

そんな一年生が入学して来て丁度『一ヶ月』

この日が来たのだ。

といつても今回は一年生達は始めての『変人査定』
多くのクラスから三人ずつ出してから更に学年で三人絞るのだと
か。

言つなれば『準変人査定』とでも言つべきだらうか。

7. 青春が遠のいていくヤバイ

このクラスでも今からジーちゃん先生が三人を呼ぶ。

(まあ、俺が入っている筈はネーから別に良いんだけどよ……)
自分に選ばれる要素は全く無い。

梓は軽い気持ちでいた。
選ばれることなんて有り得ない、といつぱり。

梓はこのクラスにいないユキが変人に選ばれるのが目的だ。
寧ろあんだけやって選ばれない方がおかしい。
変人に認定すれば梓に対する行動も狭まれるだろう、と期待している。

選ばれた変人は先生や学校の風紀に目をつけられる。
流石のユキもそうなれば梓に何も出来ない……筈だ。

「まず一人目はの～ 白崎一～ 香枝出しゃん」

最初に呼ばれたのは、あの自傷女。

小さな声でカエデは「はい」と短く答えると音も無く前に出了。
透明な肌に長く青い髪の毛。

普通に見れば綺麗だが、やはりあの濁った瞳は変人として十分に
選ばれる要素だ。

というかあの女は選ばれて当然だろつ。
毎日のように生傷こさえやがつて。

「次は～ 中村 優名しゃん……」

その名前が呼ばれた時、クラスの生徒達は全員不思議そうに首を傾げた。

中村優名。

彼女は先程のクラス委員長だ。
成績優秀で誰にも分け隔てなく優しく、怒るとときはしっかりと怒るクラスの秩序を守る存在だ。

そんな彼女が選ばれた理由がいまいちつかめない。

「え、あ、はい！」

慌てて返事をするも本人自身も不思議そうな様子。
後ろから歩いてくる時にこっそりと話しかけてみる。

「委員長……何やつたんだよ」

「わ、私が知りたいわよ！」

やはり本人も解つて居ない様子。

だが梓は疑問に思つてもスグにまあいいか、と考え直す。

「最後はのオー……」

何故なら自分は関係無いからだ。

「えつとー……田がしばしばするのオ」

自分は成績も普通。運動神経も普通。それで通してきたからだ。
だから自分が選ばれることは無いと予想していた。

「神谷君」

呼ばれたのは神谷だった。

(……まあ可哀想だが、神谷は現代にしてみりや珍しい男氣溢れる
男だ、そこを変人として指定されりや仕方が無いか……)

「はい！」

神谷は元気に返事をすると意気揚々と立ち上がる。
何故か嬉しそうだ。

（これである変態女ともおさらば、夢の学園ライフが）

そう思つ前に、ジーチャン先生が再び口を開いた。

「ああ、間違えた、狭山……狭山　梓君」

その言葉と共に梓は固まつた。

「最近田も悪くなつての一……」

等などどうでもいいことを言いながらジーチャン先生はふあつふあ
つふあと笑つている。

（は、え……はアー？）

「でわ、今呼ばれた三人は正式に決めるので体育館に来るよつこ……
もう他のクラスは行つてますよ……残りはしつかり授業を受けな
さいよ～」

梓の様子がおかしい事にも気づかずにジーチャン先生は教室を出
て行く。

「お、おい梓」

隣の神谷が心配して話しかけてくる。
それでも梓は固まつたまま。

「取り合えず行くしかないわよ梓」

「……行こう？ 梓君……」

委員長と自傷女が梓を促す。

そこでやつとフランフランと立ち上がる梓。

（い、イヤだ！ あの変態女は絶対に居る！！ 何で俺が選ばれた！？ それよりも今は準査定で選ばれただけだ！ 何としても次の査定で落ちなければ！！！）

7. 青春が遠のいていくヤバイ（後書き）

なんか暴力熱血女書書いてる時を思い出しますね。
速く更新するのって結構スキだつたんだなア

8. 上級生だってヤバイ

三階にある、とある特別な教室。

そこには三人の人間がいた。

教室だと言うのにその三人以外はおらず、妙な教室の広さが目立つ。

一人は制服を着崩した柄の悪い男。

机に座っている男は残りの二人に話しかける。

「なアお前等、今日は一年の変人査定の日だろ？ ちょっとくら見学に行かねエか？」

柄の悪い男に最初に反応したのは隣できつちりと椅子に座っている男。

制服はしつかりと着こなし、胸には生徒会のバッジをつけていた。手に持っていた本から目を外すと、柄の悪い男の方を視線が向く。几帳面な眼鏡を治す仕草と共に口を開く。

「……僕達が行く必要は無いだろう、イヤでもまた顔は合わす事になるんだからさ」

丁寧に行く事を拒否すると、再び視線は本に。

「ツチ、ムツツリ野郎め、つまんねー」

柄の悪い男に言葉に眼鏡の男は素早く反応していた。

「ぼ！ 僕はムツツリじゃないぞー！」

「おー！ ジやあ何だテメーの呼んでる卑猥な小説は！ タイトルが『人妻と綱……愛と汚れの戦い』って何だよ！」

「……コレは官能小説なんかじゃ無いぞ、保健体育の教科書だ」

凄い良いわけを返してきた事に柄の悪い男は呆れた溜息を溢す。

「ツチ……まあいい。おい、テメーはびつすンだ」
そう言つた先は残りの一人に。
柄の悪い男の後ろに居たのは綺麗な少女。

少女は浮いていた。

空中で体をくるくると回転させていた。

そんな非現実的な様子にも一人は動じていない。

「んー……面白かつかも

少女はそういうとスタン、と床に足をつけた。

「おー、良いねー！ノリ気じゃねーかー！」

「じゃ、じゃあ僕も行こうかな……そういえば体育館に用事があつたんだ……」

突然立ち上がった眼鏡に柄の悪い男はジターっと視線を向ける。

「このマツツリめ……」

「う、五月蠅あわー……香魚あゆが行くって言つてるんだから良いじゃないか……」

「つけ、良いけどよ」

香魚と呼ばれた少女は既にドアの前に立っていた。

「……速く行くよ、明日間あすま、圭けい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0342v/>

変人ハイスクール

2011年8月12日15時35分発行